

## 資料3 市内避難所・被災者調査

### A 氏(64歳) いわき市小名浜

日時:2011年6月2日 10時~11時半 友人宅

インタビュアー:松本

#### <プロフィール>

生まれも育ちもいわき市の小名浜である。父が東北電力に勤めていた関係で泉に3~5歳の間に住んでいたが、5歳の時に小名浜君が塚に引っ越してきた。中学校を卒業後、数ヶ月家事手伝いをした後、姉と一緒に千葉県船橋市の製麺所に勤めたが、その女将さんとの関係がうまくいかず、やはり姉と2人でいわきに戻ってきた。その後、地元の渡辺陶器店に勤め、その間の昭和45年に結婚、46年に長女、48年に長男を出産した(出産の間は求職していたりした)。ただ、長男は仮死状態で生まれたために若干の障害が残り、小学校4年以降は養護学校に通っていた(小名浜一小→いわき養護学校→富岡養護学校→上遠野にある富士見厚生院)。その後、小名浜マルイチ加工に10数年勤め、平成5年に夫を(会社での)ガス事故で失い、現在に至っている。64歳である。因みに長女は近所にあるアイアイ(障害者施設)で働いている。その前は小太郎(寿司屋)で13年ほど働いていた。

この家は姉(郡山市在住)の家で2年前に移ってきた。

#### <3.11 被災~4月までの自宅待避>

このときは友達の確認申告につきあうために、平に向かう6号バイパス上で車の中にいた。橋の上にいたので揺れが結構大きく、車がぐらついていた。この地震を受けて、確定申告するのを中止して、夕方に自宅へ戻ってきた。家に戻ったところ、娘は鍵を持っておらず、車の中で恐怖におびえながら待っていた。泣いていたようだ。娘によれば、地震後は少し高いところに逃げたようだ。それは17時位だったと思うが、娘から職場でのことを色々聞いているうちに水道が止まってしまっていたが、停電はしなかった。

地震後にテレビは見はしたが、あまり見なかった。地震特番ばかりだったので、近所の人と「地震ばっか見なくてよい」のようなことを話していた。それは津波による被害がなかったからかもしれない。因みに小名浜郵便局や小名浜支所まで水が来ていたと聞いた。そのような状況だったので、防災無線による警告があったかどうかわからない。

その後は自宅にいたため、(避難所には来ていた)支援物資が届かず、特に水が一番困った。物資調達のための情報はテレビの(テロップで流れる)文字情報だけで、近所からの情報はなかった。次の日の原発事故についてはほとんど関心はなかった。新聞記事を見ただけだった。これについては本当のことがよくわからなかった。

#### <4.11 被災による避難所生活>

この時は食事をしており、揺れで立ってられないほどであった。空が真っ暗になって、雷雨、停電になり、テレビで津波警報を見たので、娘と二人で避難所がある小名浜一小まで歩いていった(17時過ぎ)。この避難所には5月31日までのほぼ40日間滞在した。

娘と二人で過ごした避難所生活だが、毎日、レトルトの「サトウのご飯」や韓国風のご飯であった。そんなに大きな規模ではなかったが、いくつかのグループに分かれて、それぞれで行動していたようだ。他の人は昼間は暇なのでパチンコに行っていたようで、自分たちは買い物や自宅の掃除、洗濯をしていた。そこでの友達は男女1人ずつできた。例えば、ご飯はこの4人で都合をつけて、おかずなどを持ち寄りたりした。男性は原町出身で火力発電所に勤めていたようで、この地震で植田の火力に勤めるようになったとのことだ。その人を自宅に招いて風呂を入れたりもした。

#### <防災活動と町内会>

こちらの引っ越してきて2年ということもあり、隣組や町内会といったものには入っていない。というのも、葬式は個人的にやるものになっており、自分もそうだと思うので、(必要性を感じなかったため)入会しなかった。防災訓練について、昔はあったようだが、今はなさそうだ。場所によってはやっているところもあるようだが…。近所に知り合いは多い。

### B 氏 いわき市江名

日時:平成23年10月4日

場所:ココス平店

インタビューア:菅野、洲崎、渡部、寺木

#### <震災直後～避難所に至る経緯>

震災当日は会社で仕事をしており、地震のあと家族と連絡をとり、両親が江名中学校体育館に避難したことを確認した。その時点で叔母が行方不明になっていたが、既にあたりが暗かったため、12日早朝から捜索を開始するために、11日は小名浜の叔母宅に泊まった。しかし後に、叔母が別のところに避難していたことが確認されたため、捜索は行わなかった。そして自分は12日午前5時に両親のいる江名中学校体育館に避難した。

#### <避難所での生活>

江名中学校体育館には地元住民たちが避難しており、津波で家を流されてしまった住民が多く、避難所内は暗い雰囲気にもまれていた。江名中学校の校長は知り合いだった。自分は、暗い雰囲気をなんとか拭い去ろうと、何かできることはないかと立ち上がった。最初、避難所には暖房も電気器具もなかったが、校長が工面してくれた。支援物資はたくさん入ってきたため、それを避難所内でどうまわしていくかが課題となった。

そこで、自分は校長を筆頭とした、自分を含む協力的な 6 人の中心メンバーを決めた。そのメンバーがリーダーのような役割をこなした。まず、避難所で座っていた場所ごとにグループ分けをした。自分は、第一に食事、そして第二に生活環境、第三にコミュニケーションが重要だと考えた。食事は、主婦たちの間から 3 人のリーダーを選抜し、その人たちを中心に、その他は当番制で、毎日支援物資をもとに自炊を行った。食事のルールとして、歩ける人は食事を自分で取りに来る、歩けない人には持っていき、というものを設けた。避難所の外から食事だけもらいに来る人にも、言われた人数分与えるのではなく、自ら取りに来た人にだけ与え、取りに来られない人の分は一緒に渡した。第二の生活環境として、自分は避難所内の掃除をしなければならぬと考え、協力的な数人にだけ声をかけた。すると、しばらくしてほかの避難所の人々もつられて一緒に掃除をするようになり、いつの間にか朝 8 時からの掃除が日課となっていった。こうしてみんなで掃除を始めたころから、避難所内が団結し始めた。また、午後 9 時就寝というルールも設けた。

第三のコミュニケーションであるが、地元のつながりがあったからこそ、避難生活を切り抜けることができたと考えている。あるボランティア団体が震災から 1 ヶ月ほど経った後、衝立を持ってきたが、いまさら衝立など必要ないという人がほとんどだった。ここから深い地域性が見て取れる。避難所の人々の協力と、感謝の気持ちがあったからこそ、自分は頑張ることができた。市役所からも職員が来たが、自分の指示を待つばかりで自ら動こうとせず、結果として市役所の助けをほとんど借りなかった。しかし中には、市役所での仕事が終わってから避難所にやってきて、寝ずに避難所の手伝いをしていた市役所職員も数名いた。また、九州から有名な坊さんとその弟子の坊さんたちが、避難所の人々の心のケアに来てくれた。これにより、避難所の雰囲気ガラッと明るくなった。

#### <避難所の閉鎖>

最終的に、江名中学校体育館に避難している人々は 25 人になった。自分たちは、これ以上中学生に迷惑はかけられないと考えていた。そんなおり、25 人全員の行く先が決まったため、6 月 16 日に自主的に避難所を閉めた。江名中学校は、避難所になっていた中学校の中で一番早く避難所を閉鎖した。

### C 氏(52 歳) いわき市永崎

日時:2011 年 6 月 18 日 13 時半～15 時 小名浜南君が塚の自宅

インタビュアー:松本

#### <プロフィール>

昭和 33 年 8 月 29 日生まれ。いわき市の永崎で生まれ育った。地元の小中高を出て、地元の冷機メーカーに就職した。そこで 30 年近く働いていたが、3 年前に倒産し、会社のついでで現在の会社(いわき市内郷)に転職した。もっぱらセブンイレブンにある冷蔵庫のメンテを行う仕

事である。家族構成だが、父、母、姉が2人いる。父は10年前に他界し、母と一緒に暮らしている。両方の姉は横浜と東京にそれぞれ嫁いでいる。

### <3.11 被災当時>

14時46分、自分はセブンの仕事を終えた後、常磐道に乗って会社に戻る途中だった。中郷SAで休憩しようと思った瞬間に揺れが来た。2〜3分くらい続いたと思う。すごい揺れだったことから高速道路も通行止めになりそうだと思う、すぐにSAを出て会社に向かうことにした。ラジオによれば、3時半頃に小名浜港に津波が来るとのことで、家には間に合いそうにはないとその時に思った。会社に着いたら、建物は大丈夫だったが、中の書類などが散乱しており、その片付けをしてから永崎の自宅へ戻ることにした。だいたい、11時頃だったと思うが、車で洋向台から下りて行くにつれて、津波被害を目の当たりにするようになり、どうも自宅はダメだと思った。案の定、自宅は流されてはいなかったものの、津波被害を受けていて、3台の車が自宅にささっていた(1台のワゴン(ノア or ボクシー)は消防団仲間のもので、詰所に駐めていたものが流れてきた)。自宅は海岸から5〜600mほど離れていたものの、川から50m位しか離れていないことと、自宅は周りよりもやや低いところに位置しているため、川に遡上したものでやられたらしい。跡を見ると、1.5m位、入っていたらしい。年寄りは何人かなくなったようだ。宮城沖地震の時も数十cmだったことから、津波をナメていたようだ。

母はその日、温泉(市内の中央台にある吉野谷鉱泉)に行っていたはずだが、連絡は取れなかった。携帯が全くつながらないので、連絡がとれなかった。その2日後の13日に安否がわかったのだが、まずは江名中の避難所に行ったがそこにはおらず、吉野谷鉱泉の風呂屋に行ったらそこにいた。自分としては金がかかってもよいから、環境がよいところで過ごしてもらいたかったため、結局、母は1週間ほど滞在することになった。もし、母が自宅にいたら津波で流されていただろう。そして、数日後に東京の姉に電話がつながり、安否の連絡をした。電話は朝早くどつながりやすく、昼はなかなかつながらなかった。

話は11日に戻るが、家の状態が酷かったため、その日の夜は会社で過ごすことにした。会社は水道がダメだったが、電気は通っていた。5日間そこでずっと過ごした。次の日の朝早く起きて自宅へ向かい、家の片付けをはじめ、午後会社に戻る...といった生活がしばらく続いた(因みに15日に自宅へ戻ったら屋内退避命令が出た)。最初は一人でやっていたが、じきに被災者である友人と2人でやるようになったが、らちがあかないのと仕事に専念するために自宅は放置することにした。そして、3月の下旬(25または26日)に3日間の休暇が取れたので、東京と横浜から姉夫婦、甥っ子、おじさん夫婦等の親戚が10人ほどやってきて、またお寺(坊さん)からボランティアが2人やってきて、総勢15人でかたづけをやることになり、自分の車とお寺の車3台で荷物を運び出したりしたら、1日で終わってしまった。

自分は早朝に永崎に戻り様子を見てから会社へ行ってしまう毎日だったので、周りの人の状況はわからなかったし、近所の人も自分たちの家の片付けに専念していてそれどころではなかったようだ。自分が住む永崎地区の区長、副区長は東京へ逃げていたことと、連絡がつかないため、以前の区長に無理やりお願いして、市からヨウ素をもらい、それを消防団で配布したのは

4月に入ってからだった。また、消防団の被害状況であるが、2台のポンプ車がやられた。そのうち1台は震災直後、段差が出来た道路に事故防止のために駐車していたが、津波で流されてしまった。4月に入ってから(消防団で)永崎中を歩き回って、はじめて全容を知った。

近所の人たちはどこに逃げていったかわからなかったが、4月に入ってから隣の人とも連絡を取り合うようになった。5月頃から、休みの時に自宅の片付けなどの作業をする時に、他の近所の人たちも「ここに残るのかどうか」、「いつ戻ってくるのか」、「早く戻ってこい」などという話をするようになった。

#### <避難所生活>

避難所にいたのはほぼ2ヶ月(3月15日～5月16日)だった。これだけ長くなったのはアパートが見つからないことと、5月1日に入居したところが母と2人で暮らすのには(6畳一間で)狭すぎて、消防団のつてを使って不動産屋を紹介してもらい、今のアパート(丹アパート)を斡旋してもらった。「古くてもいいなら」と言われたが、即決して契約した。

避難所での生活だが、「寝に帰った」だけでそれ以外はほとんど仕事をしていた。食事は最初はパンだったらパンだけ、米だったら米だけ、というのが続いたが、4月以降は大幅改善された。この頃からこの避難所で生活している奥さん連中が炊き出しなどに参加するようになり、料理が豊富になった。この避難所は江名中の校長が取り仕切っており、トラブルを未然に防止していた。例えば、食事は班分けをして、そのローテーションで配給をしていたり、トイレの使い方(プールの水1杯で流す)なども指示された。これだけ厳しくしてくれたのと校長が嫌われ役を買って出た形になり、みんなまとまっていた。こうした時にはこのような人がいないと難しい。

この避難所には他では入っていたテレビはなかった。というのも、テレビが風評を伝えることによって、我々の不安をあおることを防ぐためであり、精々、ビデオくらいだった。因みに自分は会社でテレビは見ていたが、それを避難所の人たちに伝えることはしなかった。あと、4月に入ってから新聞は毎日届けられるようになった。情報があまり入ってこないという見方もあるが、(入りすぎて)あおる人がいなかったのも、みんな安心して過ごした観があるため、テレビなどが置かれなくてよかったと思う。

ここは江名、中の作(この地区はまわりに小中学校がないため、避難所は江名になる)、永崎が主であり、家族単位でバラバラになって逃げていたようだ。最大で120～30人くらい、5月16日には26～7人くらいに減っていた。

#### <消防団の活動>

入団して15年くらいである。三百数十世帯ある永崎地区は2班18人が参加しており、30代～50代で構成されている。ふだんは毎月点検の活動くらいで、それ以外の活動はほとんどない。というのも、構成員はほとんどサラリーマン(2名が自営業)で集合をかけるにくいこともあるため、曜日を決めて連絡をして、出来る人だけで活動しているからである。自分が入団した15年前でもすでにサラリーマンが多かった。それ以前は自営業が多く、それなりに活動できたようだが...。そんなことなので、広報周りで津波告知の体制はあるものの、ほとんどのメンバーがサラ

リーマンなため、(今回の)昼間の活動は出来なかったし、地元の消防署との連携も人不足で難しかった。夜警の活動の主であった。

もう一つの要因は、若い人が入ってこないこともある。以前は長男しか入団できないというしきたりがあったのだが、最近はそのことを言うてられない。3 年くらい前か、小名浜から洋向台へ移ってきた人(35 歳位)が消防団活動をネットで見えて関心をもったとのことで、詰め所で面談して、他の(活動していない)団員の替わりに入団を許可した経緯がある。この組織は年功序列的な色合いが濃いので、彼はまだ中心になって引っ張っていくという形にはなっていない。

班長は4年任期となっており、それを終えると「あたり」の形で退団となり、自分もそうなるはずであったが(暗黙のルール)、今回の震災で+1 年くらいは、引き継ぎが難しいこともあるために、やる必要があるだろう。班長の役割であるが、分団会議(消防署の下に各分団(消防団)がぶら下がっている)の参加とその内容を団員に告知することである。

先にも言ったが、自分は本震時にはこちらにいなかったが、他のメンバー(ワキモトブオさん 40 歳位、小名浜の魚屋に勤務)が(12 時に定期的に鳴らす詰所にある)サイレンを鳴らして、周囲の住民への避難を促したとのことだ。このために小学生を早く帰すことが可能になり、助かったようだ。そして、2 台のうち1台のポンプ車を出動させ、地震により段差が出来た道路をふさいで交通整理をしていたところに津波がやってきたようだ。

3.11 以降の活動は出来なかった。分団から連絡があったときしか動けなかった。また、各々の生活のことも考えて、携帯で他のメンバーに連絡することもあえてしなかった。そうこうしているうちに、消防署から情報収集の依頼が来てはじめて、団員への連絡を行った。因みに全団員の携帯番号は(この携帯に)記憶されている。そんな状態であったが、ポンプ車が2台津波で流されているなかで、消防団が回っている(=ある程度機能している)だけでもよとするしかないのではないか。ウチはまだ若いのがいるから助かっているが、江名などの他地区は班長経験者がふたたび一団員となって活動するしかないのではないだろうか。

#### <町内会との関わり>

町内会自体の存在はなく、永崎芸能保存会には入会しており、2年に1回の活動には参加していた。行事(祭や盆踊り)は消防団で参加依頼が来ただけである。隣組的な組織はあり、高齢者ばかりだが7軒で構成されているが、被災後はバラバラになってしまい、はじめの間は(片付けに来た)自分以外誰もいなかった。3月下旬に東北電力の人が電気の確認(通電時のトラブル防止含めて)に来たときにも3人くらいしかいなかった。この隣組の間でも(被災前において)防災関係の話はしておらず、また昼に自分がいないため話す機会もなかったが、母がいたときには周りに声をかけていたりしていた。

そのほかの活動としては、消防団OBなどによる防犯の見回りをやっている。高齢者が多く、若い人といっても45~6歳くらいである。6~8月は地元の消毒(蚊の対策など)を6~7人で実施しており、今度は7月3日にやる予定で、自分も参加するつもりだ。今では、様子を見に行くと、「戻ってくるんだっぺな？」などと、周りからよく言われているし、自分も戻って生活したいと思っている。

## D 氏 40代 いわき市小名浜

日時:2011年6月6日 18:30~19:30

インタビューー:菅野、寺木

### <プロフィール>

神奈川県に生まれのちに福島市へ。そして、川俣町の縫製会社に就職する。その後、旦那さんと知り合い、飯舘村に嫁いだ。そこで、娘、息子それぞれ1人の子宝に恵まれた。娘は現在福島市で仕事に就いており、息子は川崎で奥さんと子供と生活している。自分は5年前にいわき市に移り、魚の加工工場に勤めている。旦那は千葉のほうへ単身赴任しているため、現在一人暮らしをしている。

### <3.11 被災～4月までの避難>

震災当日、工作中15:30の休憩までもう一息だと気合を入れなおしたときに、地震が起こった。この時、当然作業中であり、魚を並べたりとの作業をしていたが、揺れが強くなるにつれ危機感を感じ、各自が作業台の下にもぐり、その作業台の脚をつかんで耐えた。しかし、作業台の脚をつかんでいるにもかかわらず、台は強く揺れた。揺れがいったん落ち着き、社員同士で「次は津波が来るよね」という話になった。情報がないということで、すぐにテレビのある部屋に向かったが、テレビは自身の揺れで倒れていたため、それを直してからテレビを付け情報収集を始めた。そのとき、職場は停電にはならなかったからこそテレビは見る事が出来た。電話は通じずバラバラに住んでいる家族には全く連絡が取れなかった。

テレビを見ていると、やはり津波が来るということで、職場はある程度、海から離れているということもあったので、上の階に避難した。しかし、津波は職場には届かなかったものの手前100mの所くらいまでは来ていたという。波が落ち着いてから、自宅は職場から徒歩5分程度の場所だったので様子を見に帰った。帰ると、自宅自体は特に壊れたりしたところはなかった。その晩、一人暮らしで不安なため友人宅に泊まり、一夜を過ごした。翌日、近所の人はみな避難してしまっていて明かりはなく物騒で不安になっていたところに、友人が「市民会館が避難所になっているから行こう」と誘ってくれたため、市民会館へ避難した。

### <避難所での生活>

避難所に行くと、支援物資として食事代わりに初めのうちはプリン1個が配られた。その後はしばらくパン食が続いた。元々、パンが余り好きではないので嫌だったというが贅沢は言ってもらえないと食べた。他には冷凍のケーキが来たり、かっぱ寿司の詰め合わせセットが来た。その後、水が出るようになってからやっと炊き出しが始まった。

その後、だんだんともめ事も出るようになってきた。避難所は様々な人が集まっている団体行動の場である。にもかかわらず夜に、「いびきがうるさい」だとか、トイレに行くのに「ふすまを開ける音がうるさい。静かにしろ！」だという文句を言う人が出た。自分は「嫌なら出て行け」と本人に言うことはもめ事を大きくするだけなので言わなかったが、正直ずっとそのように思っていた。

炊き出しも作る方にまわったりしたが、こういうとき人は我が身一番になるのだとショックを受けた。もらえるならいくらでもほしいと思い、あとに配給される人の分がなくなったり、仕事をしていて帰りが遅くなる人の分が足りなくなりそうになったりということもしばしば起こった。

#### <防災活動と町内会>

町内会関連のことに關しては、いわきに移り住む前に飯館村にいたころと比べながら話をしてくれた。飯館村では、隣近所は家族のように付き合いをしていたという。近所の子が悪さをしていれば、自分の子だろうが何だろうが、誰かがすぐに叱ったりと本当に近い関係を築いていた。防災訓練も半年に1回は必ずあり必ずみんな参加していた。また、村長も 16 年続けて同じで、非常に村民のことを考えた政策を行ってくれるということで、村民からの信頼も厚かった。一方で、いわき市に移ったら町内会や隣組とは全く疎遠になった。というのも、一軒家に住んでいる人は町内会に入るように言われるが、アパート・マンション暮らしの人には一切入会の勧誘には全く来なかったからである。

そして、結果として町内会には入っていない。さらに周りの様子を見ていると、町内会や隣組が機能している様子は全くないという。市長に対してもあまりよい印象はないようである。子供たちは、それぞれ、しょっちゅう同窓会などを行っているらしい。しかし、息子は、放射能の影響を心配して(子供が小さい)盆、正月は戻りたくないといっている。

希望としては、飯館村に住んでいる時のような周りの人たちの温かさが非常によかったので、積極的に町内会や隣組から周りの人とのつながりを作り、人と人とのつながりというのができたらいいなという願いにも近いものがある。

### **E 氏(69 歳) いわき市薄磯**

日時:2011 年 6 月 7 日 17 時~18 時半 自宅

インタビュアー:松本、洲崎

#### <プロフィール>

昭和 17 年 1 月 6 日生まれ。夫は 70 歳。小名浜小湊で育った。現在の実家は小名浜玉川にある。地元の小中高を出て、23 歳まで資生堂の化粧品店に勤め、昭和 41 年の 24 歳で(薄磯在住の)現在の夫と結婚した。昭和 42 年に長男、昭和 46 年に次男を出産して、次男についてはいわき市内でパーマ屋を経営している。

#### <3.11 被災当時>

14 時 46 分には炊事をしていて、揺れによりまったく身動きが出来なかった。大きな揺れだったこともあり、築三十数年の前の家が倒れ、自宅(築四十数年)にそのがれきが入ってきた。毛糸の帽子をかぶっていたこともあってかヘルメット代わりになり、頭部へのけがはなかった。これには驚いたが、津波はこないと思った。というのも、チリ地震の時の津波も 20 センチ程度だ

ったこともあり、周りのみんなも甘く見ていたと思う。

1 回目の地震で防災無線のスピーカーが壊れてしまい、津波などに関する情報がそこから入ってこなかった。そのときには次男（パーマ屋を三軒経営）が銀行に来て、その行員に自分たちの安否を（自分の家は大丈夫そうだという）確認して、安心して帰ったようだ。でも、そこも津波でやられたので、ちょっと遅かったらダメだっただろう。

津波の第一波が来たが、それを見て、おかしい塩しぶきで異変を感じた人は助かったようだ。また、消防署の人も「これだけ大きい地震が来たから津波がくる」と走って回っていた。そうしたことから、犬を連れて第一の避難場所として決めていたウスイ神社に逃げていったら、ゴーッと黒い壁のような波がやってきたのが見え、一番先に逃げてきた自分でさえも、膝上まで水が来た。その後ろに保育士の知り合いがじいさん、ばあさんを手で引っ張って連れてきたが、波で手が離れ流されていったようだ。また、逃がっている最中に裏山のプロパンガスが破裂する音が聞こえ、ウスイ神社に逃げていた我々に対して、ゴンゲン山に逃げろという連絡があった。その山はきつい斜面なので、ロープをつたって登っていった（まるまた工場の駐車場にいたが、「もう一つの山に逃げよう」ということになった。そこを人びとが登っていく光景は山の本よりも人の山のように見えた：前後の字間を確認）。こうした避難方法は回覧板で回しており、ちなみに昨年度まで組長を務めていた。

警報解除後は工場の駐車場に戻り、塩屋崎カントリークラブが避難所となるので、自力で歩ける人は歩いて、そうでない人は用意する車で連れて行くことになった。停電していたので、夜になると暗かったが、自衛隊のジープが来て周りを照らしてくれた。23 時頃、カンパンが支給されたが、6 人に 1 個の割合だった。そこで一晩過ごした。

薄磯は 260 軒くらいの地域だったが、130 数名死亡し、かまぼこ工場のスタッフも亡くなった。自分は北街の地区で、うちの組はウスイ神社から 200 メートルと近かったためか、助かった人が多かった。神社から遠い中町、南町、鹿町？は被害が多かった。自分たちの避難が手一杯で他の人を助けられなかった。

ちなみに夫は漁業に従事しているが、そのときは海上にいて、15 時過ぎからバーベキューを会社でやる予定になっていたようだ。地震があったとき、山側を見たら杉の木が揺らされて花粉がものすごく舞っていた。すぐラジオをつけたところ、「第一波は四倉の道の駅に達し、床下浸水」という報道があった。津波は沖に逃げればよいため、沖に逃げていた。携帯電話は全く通じず、息子や妻にも 2 日間、まったく連絡が取れなかった。

#### <町内会との関わり>

薄磯北街組に所属しており、自分は 3 月末まで組長を務めていた。これは 1 年交替。この組は 16 軒で構成され、今回の津波で亡くなったのは組内で 4 名（家にモノを取りに行った 50 代、寝たきりのおばあさん、「津波は来ない」と言って残っていた老夫婦）だった。

回覧板を回す以外の防災活動はやっていなかった。せいぜい、消防団が強風の時に回ってくるだけだった。薄磯の部落は上街、北街、中街、南街、鹿町の 5 つの町で構成されているが、全体での活動もなかった。というのも、台風などが来ても「ここは安全」だと思いこんでいたから。

また、薄磯区の区長(82歳前後)が夫婦で亡くなった。

#### <避難所生活について>

3月12日～5月17日は平工業高校の避難所で過ごした。避難所にはテレビはなく、ラジオしかなかったために、避難所内であちこち歩き回って話していた。隣組の16名ほどがこの避難所で過ごし、色々な話が出来た。他の地域からの人たちも、「これからどうするか」、「(みんな)バラバラになってしまう」、「今後の住宅をどうするか、何処に建てるのか」等の話をしていた。また、豊間地区の顔見知りが多かったが、2組ほどの楢葉からの避難者はぼつんとしていた。ストーブを囲みながら、男5～6人で酒を飲んでいたりしたようだ。

この避難所は待遇がよく、食べ物も他と比べてよかったようだ。その理由の一つとして、加藤リーダーの存在が大きい。この避難所はA～J班の10班で構成され、それぞれに班長を指名し、物資を班長に渡したり、毎日19時に班長会議を行い次の日の打ち合わせをしていた。また、仮設トイレを自発的に掃除する人や、土木関係の人たちはプールからの水をくみ取るトイレのポンプを設置していたりした。

また、平工業の野球部の生徒が朝早く来て、肩もみや足もみや掃除や犬(3匹)の散歩などもやってくれた。不幸なこともあったが、今となっては楽しい思い出もいえ、一つの釜の飯を食べ合ったという意識の方が大きい。

#### <現在の住まいと今後について>

今、住んでいる雇用促進住宅はいわき市が買い取って入居させてくれた。ここは隣組/部落の人が多いため、周りにはほぼ顔見知りである。ここは3人以上いないと入居できないために、他の隣組の人たちに「同居人をつけて申し込み」と声をかけ、その結果、2次募集で入れた(因みに自分たちは1次募集で入った)。自分たちの部屋は102号室だが、101号室は薄磯時代の家の隣である。また、この住宅の自治会長から「避難民の会長になってほしい」と言われている。今後も海を見て過ごしたいと考えており、(生活に対する)不安はあまりない。

### E 氏(69歳) 2回目

日時:8月11日 15:00～17:00

インタビュアー:菅野、洲崎

#### <あれからの現状>

夏本番になり、暑さに悩まされる。クーラーは9月14日に市が負担してつけるという。しかし、暑いのは今であって、この暑くなる時期に合わせなかったのか不明だとのこと。さらには、クーラーを使用するにあたって光熱費がかさむことも不安視している。

光熱費がかさむという点で、金銭的な不安がととても大きい。自分を含め周りの人など、被災者が高齢なため働くことが難しく、お金の確保が容易ではない。なので、国や役所には被災者に

「現金」を少しでももっとしっかりと分け与えてほしい。

#### <現状での問題点>

現状での一番大きな問題点は、やはり元からいた雇用促進住宅の人々との人間関係である。避難者が、挨拶をしても返ってくるためしがほとんどないとのことだ。そのほかにも、ドアをけられたりする人がいたり、昔からいた頭のような人に、回覧板回しについて怒鳴られたりした人もいたようだ。さらには、避難者の子供(大人もあるが)の虐めがひどいらしい。原因は多々あるようだが、一番は妬みだという。それは、「日赤からの家電セットをお前らはもらえるのに、私らなんか、羽 1 枚もらって終わりなんだよ!」と難癖をつけられるという。逆におせっかいの人がいて、内情に不用意に入ってくる人もいるようだ。

そのほかには、住宅自体が古いのでガス管が部屋の中でむき出しになっていたり、風呂のお湯が出ないなどの生活に関する不安も多々ある。

### F 氏 いわき市豊間

日時:2011年8月11日 15:00~17:00

インタビューー:菅野、洲崎

#### <震災時>

地震時はエブリアにいて、地震が起き豊間の自宅に帰ったところで、津波に襲われた。脱衣所の扉付近に掴まり、首まで水は来たが何とか助かったという。大嶺神社にたまたま通りかかった男性に手を引かれ連れて行ってもらったという。その後、塩屋崎カントリーへ移動した。

家族(7人家族(自分、夫70近い、子:妻、2子供))とは、ずっと連絡が取れなかったが、偶然避難所で後ろに座っていたのが夫だった。その後、息子家族と合流。娘の行方がしばらく不明だった。3、4日心当たりを探し回ってもいなかったため、警察に聞くと、遺体安置所へ行くよう促され、「そんな失礼な話があるか!心遣いもない」といった。しかし、のちに友人から電話が入り、いたと分かった。娘も探しまわっており、入れ違いになっていたという。

#### <現在の生活と問題点>

6回、避難先を回ったのちに、現在の雇用促進住宅に落ち着いた。しかし、津波によって壊された、家の解体に多くの書類やハンコが必要で大変だった。その中には、ローンのため銀行のハンコも必要だという。地震保険は入っていなかった。

夫の収入もじき年金のみになるので、返済が難しくなる。今までは息子夫婦と半分だったが、今は、別に暮らしているので自分たちが払うようになった。収入がなくなり限界まで払い、そこが来たら、自己破産まで考えている。しかし、自己破産には、貯金100万以下、車1台などの制約もあるし娘がまだ独身のため、親が自己破産したという跡が残ってしまうため、結婚しづらくなったらとの心配もある。

## G 氏 双葉郡榑葉町

日時:2011年6月15日 16時～

インタビュアー:渡部、矢内

### <プロフィール>

会社員(兼業農家)。両親と自分→サザンパシフィックホテルへ避難。弟と祖父母→内郷の中の湯へ避難。家族はばらばらに避難しているが一緒に仮設住宅に入居予定(7月中旬～8月)。3Kなので、順序的には後回しなので遅い。榑葉の行政機関のある会津美里町だと対応がもう少し速いが、会津まで行くメリットが自分にはない。また、東電社員に知り合いがおり、一定の情報源になっていた。

### <震災直後の状況>

火力発電所の近くの会社にて仕事をしていたところに地震が発生し、町内放送「高台に避難するように(津波への対応)」があった。原発に関する指示はなかった。直後は外に出ている人がほとんど。ライフラインが夕方にダウン。災害時用ハザードマップが事前に用意されていたが津波に関するものはなかった。

### <自治会と防災活動>

自治会の活動は清掃活動程度。連絡手段は回覧板や電話が主。災害時は自治会の集会所が避難場所として決められていたが、今回の地震では集合しなかった。地震の次の日、町内放送で「原発が危ないので、南に逃げるように」。加えて「草野小学校へ」という指示があった。

### <被災状況>

兼業農家のため、農作物に被害が生じ、水田(出荷用)=年間40～50万円。そして、野菜は自宅用にした。実害は原発被害のみである。

### <現在までの経過と評価>

町内放送で避難勧告を受け、両親を連れて車で避難し、弟・祖父母とは別々に避難(車に乗り切れなかったため)。避難の際、持ち物は一週間分の着替え程度とパソコン(SIMカードにより、インターネット接続可能)で、「一週間くらいで帰れるだろう」と思っていた。家族は「地元離れたくない」と言ったので、福島に残ることを決意した。もし、一人だったら関西への避難を考えた。榑葉町の指定避難所である草野小学校に避難したが、満員のため受け入れを拒否される。その後の行き先等の指示は一切なし、一方的に断られたので、神谷で2日間車内泊した。その後、爆発音を聞き(「原発が爆発したのでは?」、南へ逃げることに決め、小名浜二中へ避難(2ヶ月程度生活)。そして、避難所縮小の通知・説明を受け、現在の避難場所へ移った。避難5日目で弟たちと連絡が繋がる(お互いの携帯電話により)。しかし、ガソリンがないため、会うことは断念した。

小名浜二中での食生活は三週間三食菓子パン。お風呂は自衛隊の用意したお風呂か、銭湯など。プライバシーは全くなし(不満はたくさんあるが強いて挙げるなら)。他の避難者との会話については、「どこから来たのか」や「被害の状況」などであった。自分はパソコン(SIMカード)での情報収集を行ったが、他の避難者は、新聞・ラジオ・テレビで情報収集をしていた。防寒はストーブと毛布だけだった。お年寄りには厳しい寒さだったようだ。NPO運営のため、欲しい物は手に入った。

一方、いわき市運営の避難所は、質が悪かったようだ。例えば、食事は三食出ないことも(泉公民館)や、物資も足りず、衛生面も悪い等である。避難所縮小の勧告を口頭・用紙で受けた。450人いた避難者が、出るときは40人程度になっていた。

東電社員から状況が報道以上に悪いことは聞いていた

#### <今後の生活と期待>

復興が見えてこない(自分の会社の修理にも東京から来たがらない)。主に福島県では風評被害が激しい、個人レベルでは解決できない。世界レベルで原発=Fukushimaとなっている。楢葉町には土壌の状態を見ないと帰るかどうかの判断はできない。いわき市に根を張ることも考えている(給付金との折り合いで今すぐではないが)。

一時帰宅は今日の日曜日(1日120人程で、1世帯2人まで)。申し込みをして連絡を待っていた。戻る理由は「家の状態を確認したいから」で、持ってきたものは特になし。

これからの行政の補償をしっかりと欲しい。というのも未だにあやふやで、自分の水田や畑に対する補償額などがわからないから。子供たちがとても可哀相だ。「自分は影響が出るのが高齢になってからだが、若い人はそうはいかない」。

### H 氏(63歳) いわき市小名浜

日時:2011年6月22日 14時~15時30分 自宅

インタビュアー:菅野、洲崎、矢内

#### <プロフィール>

神奈川県生まれ、昭和45年、22歳の時に母の実家である小名浜へ、証券会社などに勤務し昭和51年28歳の時に結婚、長男、長女、次女を儲けた。しかし、昭和57年に離婚、その後も職を転々とし、平成7年から再び横浜へ。平成19年に母が病気のため再び小名浜へ、母の病後母が好きだった現在の家に住むことに。三人の子供たちは長男はいわき、長女は横浜、次女はいわきへ住んでいる。

#### <震災当日からの流れ>

震災当日は家でテレビを見ていた。隣の住人が高齢のおばあちゃんだったため、そのおばあちゃん達を守りながら避難した。大津波警報は携帯とテレビの情報で気づいた。さらに港の

船が何度も汽笛をならしていたためそれからも気づいた。津波は床下ぎりぎりまで押し寄せた。ちなみにこのときに隣組の呼びかけなどは一切なかったという。次女の夫が車で迎えに来たがおばあちゃん達が心配だということで避難場所の小名浜の東小学校まで送ってもらった。しかし、避難所は二中ということでそこまで雪の降る中歩いて移動した。

#### <避難所での生活(二中)>

初日の食事は乾パンのみだった。二日目以降はサトウのごはんや缶詰、パンなどがでた、しかし、レンジやお湯がなかったためサトウのごはんは食べられなかった。二週間後にレンジやポットがきた。コミュニケーションは一部の人のみとれた。しかし、食事のときだけ来る人などがいたらしく雰囲気はよいとはいえなかった。ボランティアグループなどがきて炊き出しなどもしてくれたのがありがたかった。

#### <町内会と防災活動>

日ごろから町内会の活動などはほぼ皆無であった。組長や区長などの顔さらかからない有様である。隣組は自由加入で組費が高いため加入しない場合もある。回覧板などで避難訓練などの知らせはあったらしいが参加者はなかった。

#### <今後の期待と不安>

地域ごとの避難所が欲しい。学校などの施設では環境が悪すぎる。トイレを例にとっても階段の上にあったり、和式であったり、体が不自由な人にとっては使いにくいものである。またなにか復興支援をしようにもそのグループが入れる場所が用意できない、そういった場所も用意して欲しい。義援金なども入っているのなら均等に配布してほしい。金銭面では行政に不満が高い。

### I 氏(74歳) 双葉郡富岡町

日時:2011年6月2日 15時半~17時 内郷コミュニティセンター

インタビュアー:松本、遠藤

#### <プロフィール>

双葉郡の富岡町出身で両親(竹細工の仕事をしていた)も富岡出身である。昭和12年3月15日生まれで、男1人、女3人(姉1人:盛岡市在住、妹2人)の4人きょうだいである。地元の小中学校(最終学歴は富岡第二中学校)を経て、高校に行く予定だったが、両親が「おまえは働け」ということで断ってしまい、実家の竹細工の仕事を手伝った。その後、東京へ土方作業などの出稼ぎで過ごしていた。その後、30歳で結婚し(妻は2歳下?)、富岡に200坪の土地を買って家を建てた。その頃に、職業安定所の紹介で東電関係の仕事に就くことになった(正社員になったのはもう少し後)。周りの人もどんどん豊かになっていったのがわかった。基本は仕

事漬けの毎日で、女川や島根などへの出張が多かった。結婚後、40 歳くらいまでに子供を 3 人もうけ、男 1 人(40 歳前後、能登で原発関係の仕事をしている)、女 2 人(2 人とも東京に在住)で、孫が 3 人いる。因みに定年のちょっと前に妻が亡くなった。定年(60 歳)後は山登りなど、趣味に時間を費やしている。

### <3.11 被災後>

3 月 11 日は川内村にある山に 1 人で登っていたが、昼頃に戻ってきて、食事をとっていたときに地震に遭った。家の中のものはすべて倒れたり、玄関にもヒビが入ったりして、建物倒壊の心配があったので、ゴザを敷いて外にいた。隣に住んでいた(5~6 歳下の)人は「これから逃げる」といって、息子の車に乗っていったが、その後のことはわからない。自分が住んでいた王塚区(300 戸前後で構成)は高台にあったので津波被害はなかった。

次の日になると、「東電の原発で何かがあった」と外で人が騒ぐようになった。停電になっていたため、各家庭にある有線放送が聞けず、またテレビも見られなかった。ラジオは持っていたが、それに気をかける余裕もなかった。そういう理由で、一切、原発に関する情報は入ってこなかった。

そして、13 日の早朝 4~5 時位に、面識のない一人の男性が「(避難のために)乗せてくれないか?」と言われたので、80 歳位の親とその子供を乗せて、国道 6 号を使っていわきまで行くことにした。久ノ浜をこえて四倉に来たら消防隊の人たちがいたので、避難場所を聞いたら、「平保健所」と地図を描かれ指示された。そこでスクリーニングを受けて、避難所として御厩小学校が指定された。体育館は一杯で、2 階または 3 階の教室へ行き、5 月中旬までそこで過ごした。避難所で知り合いになった人もいたが、どこから来たかなど、四方山話に終始していたような気がする。

3 月一杯は他の人の世話ばかりしていたこともあり、身内にはまったく連絡を取っておらず、子供たちも「父さんは(無事なんだろうが)どこに避難しているか?」と心配していたようだ。なので、4 月初めに、茨城県の大津港に住んでいる妹のところへ行ったら怒られ、「他の人たちに早く電話しろ」と言われて、あちこちに電話するようになった。

### <防災活動と町内会>

避難のプロセスで町役場や町内会は何の機能もしていなかった。避難用のバスを用意するという連絡は受けたが、具体的な出発時刻や集合場所が示されなかった。役所に一時避難を申し込んだが、その反応もなかった。このように情報が入ってこなかったため、個人個人で逃げるのが精一杯だったと思う。また、近所の人たちもその後どうなったか、連絡を取り合っていないので、全く知らない。

3 月 11 日であるが、「津波を見に行こう」として巻き込まれて犠牲になった人が多いと聞いている。

王塚区(300 戸位で構成)の町内会(区内会)には加入しており、老人会(メンバーは百数十名)などの世話役を多くして、(自分は人に役立つための)いろんな活動をしたと思う。マンショ

ンなどの集合住宅もいくつか建設されており、そこには東電関連で出張や転勤に来ている人たちが住んでいたようだ。防災については年に一回の防災訓練をするくらいだった。災害があまりない地域だったかもしれないが、訓練の重要性に気づいていなかった。今回の災害についても、役場から一切連絡がなかった。ただ、防犯活動はしっかりやっていたと思う。具体的には、交通安全 運動(自転車事故防止など)や子供の不審者からの見守りなどである。

富岡町にずっと住んでいたが、変わり始めたのは 30 歳代(昭和 40 年代)の頃だったと思う。それまで貧乏な生活を送っていた周りの人たちが贅沢(車や家を買ったり、遊んだりなど)を覚えて、金遣いも荒くなった。原発を建設していた頃は 2 万人くらいいたが、その後色々な場所で原発が建設されるようになると、そちらへ人が流れるようになり、人がどんどん減っていった。

町内の関係で見ると、東電直系の企業に勤める人とそうでない人の格差が見えるようになったかもしれない。直系の企業に勤める人は自慢したり、テングになったりしていたようだ。子供たちには(自分も直系の企業に勤めていたこともあるのと、それまでは貧乏な地域であることを知っていたので)「テングになるな！」と常に諭していたが、都会から来た人たちにはそのような感覚はなかったようだ。

#### <避難所などについて>

計画的に避難民を動かしてほしかった。自分がここ(内郷コミュニティセンター)に移動する前には紙切れを渡されるだけ(写真資料)で、本来、このような公共施設は国々われわれのものでもあるのだから、もっと考えてほしい。また、最初からどこか一括して広い場所を確保しておくべきだったのではないかな。いわき市内でも廃校になった学校や分校が数多くあるはずで、それを有効活用すればよかったのではないかな。

また、住宅転居についてもいわき市民が優遇されて、双葉郡は後回しになっている観があるのも問題だろう。原発があったおかげでいわきも栄えたのだから…。因みに、4 月下旬から独自に家を探し始め、5 月 10 日頃にここの近所にある戸建ての家を見つけ、今日、転居許可が下りた。

### J 氏(64 歳) 南相馬市小高区

日時:2011 年 5 月 31 日 15 時半～17 時半 高久公民館

インタビュー:松本、大勝、洲崎、寺木

#### <プロフィール>

生まれは双葉郡広野町。被災時は南相馬市小高区泉沢字に住んでいた。地元の小中高を出た後、昭和 41 年頃から 57 年まで仕事で東京で暮らし、江東区→墨田区→江戸川区に住んでいた。

1 回目の結婚は東京だったが妻の死別(昭和 56 年)と、再婚相手が小高だったこともあり、こちらに戻ってきた。再婚したのは昭和 57 年。昭和 57 年から地元の建設会社で働き、平成元年

に自分で建設会社を設立したが(柏建設)、4人の娘が成人したことと地方をめぐる経済状況が悪化して先が見えなくなったで、負債が生じる前に法人を解散した。解散届を出したその足でハローワークへ行き、年金をもらいながらパートで働こうと思ったが、結局、地元の建設会社で正社員として働いて今に至っている。

家族構成は妻との間に4姉妹をもうけ、長女(昭和57年生)、次女(昭和60年生)、三女&四女(双子、昭和62年生)である。長女は理容専門学校時代の同級生と結婚して、いわき市内(かべや)に住んでおり、夫は床屋で働いている。次女は桜の聖母短大を出た後にいわきカローラに入社して、南相馬市鹿島区に住んでいた。三女も桜の聖母短大を出た後に七十七銀行の原町店に勤務していたが、結婚して新潟へ行った。四女は仙台理容美容学校に通っていた。

### <3.11 被災当時>

3月11日は県の補助事業である田畑の土地改良(客土作業)を、被害が多かった南相馬小沢地区にて6人で行ってた。田んぼだったために揺れが大きかったのか、本震時は乗っていた重機がひっくり返りそうで、とても下りて逃げる状況ではなかったため、揺れが収まったときにすぐに脱出した。常に携帯の緊急地震速報が鳴りっぱなしだった気がする。10分後くらいに、携帯(ドコモ)から「7m30cmの津波発生」というメールが入り、3m程の高さがある堤防に避難していたが、とてもここでは駄目だと思い、車で逃げることにした。一度、高いところに逃げたが、不安になり、国道6号線を越えるところまで逃げた。その10分程で津波が来た。携帯を持っていたから助かったと思う。

因みにそれまで2回ほど、津波警報がありそのたびに逃げていたが、実際にはたいした津波ではなかった。それでも、今回の大きさは尋常ではなく、とにかく逃げようと思った。自分たちが作業していた小沢地区はほぼ海拔0m地帯であったが、自分たちが逃げている最中、地区を見ても、人びとが逃げている様子はなく、また防災無線も耳には入らなかった。逃げ切れなかった人は車を持っていないまたは高齢者夫婦だったようだ。逃げなかった人がいたのは津波をなめていたのだろう。我々の場合は、県の事業で行っているものなので、こうした警報が出たときに避難しないと指導が入り、仕事がなくなってしまうこともあるために、逃げざるを得ないという事情もあった。

車に6人乗って小高区八影にある会社に逃げ(この地区は被害が少なかった)、15時15分くらいだったか、そのあたりで解散した。自分は会社から2kmほど離れた自宅(泉沢)へ自動車に戻ったが、余震が続いているためか、妻は家を出てひとり車の中でふるえていた。その後は自宅で片付けをしながら過ごしたり、水道が出なくなったために、飲み水を購入しに町まで出たが、小高駅まで軽自動車などが流れてくるのを目の当たりにした。こうした津波被害の光景を見ながら、コンビニなどで飲料水を集めた。他の人も色々な商品を買ってあさっていた(16~17時)。自宅は30年前に建てたものだが、建物自体についてはほとんど被害もなく、片付けをしながら、今後の復興に向けて動いていた。

その後、双葉に住んでいる四女への連絡が取れないでいたが、20時にこちらに到着して無事が確認できた。娘の話によれば、国道288号線を跨ぐJR常磐線の陸橋が落ちていて、その

隙間を自動車が走っていたとのことだ。

日頃の備えは個人的に行っていた。そろそろ大きな地震があるのではないかと、家族に笑われながらも、去年あたりからドラム缶で風呂をつくったり、囲炉裏や薪を用意したりしていたが、「原発」は想定外だった。

### <3.12 被災当時>

8 時半に鹿島区へ嫁いでいった次女が来るまで迎えに来た。「早く逃げろ」「のんびりして何をやっているのか」という娘は、のんびりしていた自分をみかねて「家の前の道路を見て」と言われて、自宅前の旧国道 6 号を見ると、仙台方面に下る車だけで、富岡方面の車が一台もないことがわかり、ただごとではないことがようやくわかった。妻が権利書や通帳が入った一式の箱を持った後、娘の車と二台で鹿島にある中学校の体育館(娘が場所をいっぱいになる前に確保してくれていた)へ向かった(到着は 9 時 40 分頃)。その避難所には 100 人前後が収容されていたが、携帯もつながらず、テレビやラジオもなく、まったく情報が入らない状況だった。

そして、昼頃に一度自宅へ戻ることにして、4~5 日程度で帰れると思っていたため、最低限必要なものだけを持ち出し、ペットの犬(室外)には 4~5 日程度のえさを出しただけだった。家を出る 12 時半頃だったか、路側帯に防護服&防毒マスクを装備した警察官が待機していた。避難所に戻るときに(13 時頃)、50~60 世帯程の規模である泉沢行政区長に「原発が危険だ」という情報が入ったので鹿島区へ避難することを伝えた。こたつに入って暖をとっていた区長は原発について「何も聞いていない」、「小高区からの連絡も入っていない」と言っていた。そのため、この行政区内ではじめの段階で逃げたのは自分たちだけかもしれない。この区長(熊田俊一さん)は 12 日の朝 6 時半に、区内の一軒一軒を自転車で回って安否確認するなど、区長としての責任は果たしていたと思う。因みにふだんの防災活動については、防災の日(9 月 1 日)だけに集落センターなどへの避難訓練を行っていたものの、原発については安全神話というものもあり、何の対策もしていなかった。また、この地区の人たちがその後、どうなったかはまったくわからない。

避難所に戻り、16 時半~17 時位に原発の爆発をそこにいる人から聞き、避難所にいる人たちはみんな青ざめていた。ただ、18 時に市の職員が「爆発は誤報」と言い、情報が錯綜していたが、21 時頃に次女がずっと新潟にいる三女に電話をかけ、ようやくつながったところ、「はやく新潟へ来て!」と言われ、他地域にいる人の方が情報を持っているようだった。また、若い人たちはネットを通じて、こうした状況は把握していたらしい。

こうして 5~7 日くらい避難所にいた。その理由の一つとして、次女の夫が消防団の仕事があり、逃げられなかったこともある。ただ、いつの間にか(一番の若手である)自分以外のメンバー、すべて逃げてしまったことがわかり、それで自分たちも逃げようと決意したようだ。その後、1 日かけて津波被害を受けた車からガソリンを抜き取り、夫の VOXY と自分の Vitz にそれぞれ給油し、新潟までの燃料を確保した。

避難所のスタッフにここから脱出する旨を伝え、おにぎり 8 人分を用意してくれた。また、自分たちが知っていた人たちで、そうしたことも伝えずに米沢などに逃げていくことも多かったようだ。

避難所において感じたのだが、周囲の人たちは行政任せであり、その行政もまったく情報を提供してくれず、新潟の避難所に着いてはじめて全容を知ったのである。もし、若い人たちが情報をくれなかったら、そのままいたかもしれない。また、職員に対して生活待遇などに関する苦情などでくっつき、騒いだり、けんかになったりしていた。

新潟への避難は夜に出て、国道 115 号→猪苗代→国道 49 号と来て、そこから津川 IC の間に道の駅のような施設に詰めている警官から避難方法に関する指示を受け、磐越道に乗って新潟中央 IC で下り、スクリーニングを受けた後、市内の体育館へ移動した。その後、妻と次女が新潟に残り、長女家族が床屋を再開するというので 4 月 9 日にいわきへ戻ってきた。

#### <原発等について>

中学校の頃、学校では「この辺は過疎から脱却できる」、「原子力発電所によって「東北のチベットである相双地区は豊かになる」、「他と肩を並べられる地区になる」と言われた。「豊かになる」という考えには反対はなかったと思うが、そのツケが大きかったと今となっては思う。

また、原発事故時の緊急避難道路が設定されていたが、これは生活道路をつなげたもので幅員もバラバラではほぼ海沿いの道ということもあり、今回の津波でまったく使い物にならなかった。

今回の震災などでわかったが、自分が津波から助かったのは県による「半強制」があったから避難したのであり、日頃の訓練も含めて、こうした強制がある程度必要なのであり、自主参加では誰も本気になって取り組まないのではないかと思う。そして、こうした取組は地域の仕組みなどをふまえて設計しなければならないのだろう。

### **K 氏(30代) 双葉郡楢葉町**

日時:2011年6月1日 18時半～19時 ホテル塩屋崎

インタビューー:松本、遠藤、菅野、渡部、矢内

#### <プロフィール>

生まれも育ちも双葉郡楢葉町である。実家は農業を営んでおり、自分がそれをついでいた。ずっと米作をやっていたが、今年からハウスを使って野菜を作ることを考えていたが、原発事故により難しくなった。家族構成は自分、母である。

#### <3.12 被災～現在>

自分の家は国道 6 号よりも内陸側にあったため、津波被害は受けなかったが、浜の方では消防団が活動していたようだ。12 日は 8 時に町の防災放送から屋内待避の命令が出て、近所のじいさん、ばあさんに教えて回った。その後「1 時間以内に急いで逃げてください」という放送が入ったので、そのじいさん、ばあさん、母を車に乗せていわき市内の草野中学校へ向かった。ただそこは一杯で入れず、中央台南小学校に行った。しかし、そこの体育館も一杯だったため

にじいさん、ばあさんだけを入れて、自分と母は車の中で 3 日くらい過ごした後にその体育館へ入った。

避難所での生活だが、食料は貧弱で朝がパン、夜がおにぎり、そのおにぎりも精々、1 日 2 回が最大で、それが 1 ヶ月以上も続いていた。パンはランチパック(ピーナッツ入り)が多く、今は見るのもいやになるほど食べた。避難所に情報が入ってこなく、そこにいる人たちとは「いつ帰れるのか」という話題ばかりだった。その避難所は原発事故により逃げてきた人が多く、津波被害を受けた人はまず J ビレッジに入り、その後 3~4 カ所たらい回しにされたようだ。

完全に立ち入り禁止になるまでに 3~4 回ほど榊葉の自宅に戻り、必要なものを持ってきたり、にわたりの様子を見に行ったが、それらは食べられてしまったものも多く、自宅内の床の間には血だけがのこっていた。また、様子を見に行った人から、墓が軒並み倒れていたり、屋根が落ちたためにシートをかけなければ...という話を聞いた。

避難所を出たのは単にそこでの生活がイヤだったからだが、大きいのは落ち着いて寝られないことだった。あれだけの人数がいるので、夜中にトイレに起きたり、足音が聞こえて気になったりと、そういうことがイヤであった。プライバシーについては自分は気にならなかった。

#### <防災活動と町内会>

町内会には加入していたが、防災訓練もなく、今回の避難には何の関与もなかったようだ。また、近所に住んでいた人たちのその後はわからない。因みに 12 日に避難するとき、隣に住んでいたじいさんは頑固に残ると言って、その日も畑へ行ってしまった。

### L 氏(56 歳) 双葉郡榊葉町

日時:2011 年 6 月 9 日 10 時半~12 時 旅館 中ノ湯

インタビュアー:松本

#### <プロフィール>

昭和 30 年 3 月生まれ。広野町で生まれ育った。地元の小中を出て、21 歳で(榊葉町竜田出身の)現在の夫と結婚した。その後、長男が昭和 52 年、長女が昭和 53 年にそれぞれ生まれ、長男はその後地元の JA に、長女は川内に住んでおり、12 日に仮設住宅へ移るようだ。被災まで自分は榊葉ときわ苑で介護職に従事していた。

#### <3.11 被災当時>

14 時 46 分、自分は富岡町に友達といた。地震が大きかったのと、宮城沖地震では壁にひびが入っていた古い家であるため、つぶれていると思った。車で自宅へ向かおうとしたが、第二原発の近くで土砂崩れがあったようで、国道 6 号が通行止めになっていた。山沿いの県道 36 号線で迂回しようと思ったが、それもダメだった。結局、旧道を通して自宅へ戻ったのは 16 時くらいだった。走っている際に近所の家の屋根が崩れていたりしていたので、自分の家もダメだ

と思った。

ほぼ同時に消防団が活動しており、南小学校の体育館への避難を指示され、そこへ行ったところ夫がおらず、津波にのまれてしまったのかという不安が出た。近所の人に聞いたら「地震後に逃げた」とのことで、別の避難所の社会福祉会館へ行ったところ、別地区(竜田地区)の人が多くいないと思ったので、また南小学校へ戻ったところ、夫と長男(JA の職場からここへ避難)がいた。それは 17 時頃で周りは暗くなっていた。夫によれば、風呂場は崩れ、前の家の人(須藤さん)などを 2 人、軽トラックに乗せて、体育館のある総合グラウンドへ逃げた。その後、天神岬で津波の状況を見ていた。

その晩は体育館で過ごし、人が多くて横になるのも難しかった。また、毛布は一人一枚もらえる数はなかった。また、家族単位で集まっていたようだ。そこには南小学校の全自動待機しており、その家族も来ていた。電話は使えなかったが、メール(docomo の SMS)は通じた。自分らはワゴン車の中で一夜を過ごした。

### <3.12 被災当時>

朝の 6 時頃、家を見に行こうと思ったら、避難所のスタッフから「外へ出ないで」と言われた。8 時頃、「9 時に朝食が配られる」という放送が入ったが、8 時半頃に「原発事故が起きたので、浪江は〇〇へ、富岡は川内へ、楢葉は(いわき市にある草野小中学校などへ)自主避難してください」という(外にある)無線放送が入った。この放送を聞いて倒れた人がいたので、(自分は介護職ということもあり)介抱して消防を待っていたら、その間に蜘蛛の子を散らすようにみんな逃げていった。その後、夫と長男、自分の 3 人でガソリンに余裕があった軽トラで逃げることにした。自分の車はガソリンがなかったので使えなかった(地震直後に入れようと思ったがダメだった)。国道 6 号は通れない、県道 36 号線なら可能ということだったので、それを使っていわき市へ入って草野のマルトに着いたが、そこまでに 6 時間かかった。長男が「水だけでも買おう」と言ったので、マルトへ入ったところ、何もなく、お茶や菓子を買えたくらいだった。その後、草野中へ行ったが満杯、6 小も満杯で廊下にいたところ、「中央台へ移ってください」と言われた。

その後、姉の親戚が迎えに来て、壁屋?にある親戚の家で世話になることになった。そこで 4 家族の多人数が同居することになった。そこにわくわく(障害者施設)の人がいた。そこで晩飯をとっていたら、テレビニュースで原発の爆発を見たので、そこにいる人たちは逃げることを決意した。他の家族は埼玉だったが、自分は姉(楢葉在住)の嫁が新潟の人とやりとりの末、新潟へ行くことから、一緒に逃げることにした。わくわくにある営業車(ガソリン満タン)を借りて、国道 49 号線を一晚中走った。津川 IC の直前にガソリンスタンドがあり、そこでガソリンを入れた後、磐越道を使って新潟入りした。

### <避難生活>

まず、十日町にある甥っ子の嫁の家で一週間(3 月 13 日～20 日朝まで)避難生活を送った。個人の家だったが、中越地震の経験から親切に接してくれ、地元の人たちから食料や菓子をもらったりした。20 人ほどがそこにおいて、殆どが家族単位であった。

そこでアパートや仕事を紹介してもらったり、「千年の湯」は避難者には無料開放してくれたりしたが、雪が深く耐えられなかった(高血圧によるものなのか、疲れてひっくり返ってしまったこともあった)。そのこともあり、夫の姉(静岡)から熱海に来いと言われたので、20日の朝9時半に十日町を出発し、同日の16時半に到着した。道中、電話とメールでやりとりしながら、首都高を避けるため、道案内をしてもらった。ちなみに新潟にいたとき、安否の連絡を(役場に?)した。それまでは行方不明者扱いだったようだ。

熱海には3月20日から4月17日までいた。熱海市役所へ行ったが、市では受け入れ体制はないとのことだったので、ハローワークへ職探しをしたが、長男はみつからず、自分は介護職だったこともあり、月水金の週3日、特養ホームでバイトをして過ごした。

17日の朝5時に熱海を出ることになったが、その理由は「わくわく」から車を借りっぱなしだったこともあり、その返却をする必要があったから。奈良に行っていた従兄弟が熱海に来ていて2泊した後に、一緒に帰ることにした。従兄弟と娘を泉の家でおろして、自分たちは栢葉へ車を取りに行くことにした。ちなみに息子は同級生に聞いて国道6号線が使えることを聞いていたため、それを使って行った。その後、車をわくわくへ返して、中央台南小に着いたのは18時ころだった。そこで驚いたのは、役場の人に「お金(見舞金のこと)をもらいに来たのか」と聞かれた。その避難所には200人ほどいたため、兄がネットでアパートを探してくれたが、それもなく、ホテルはお金がかかるということで、その避難所に居続けることになった。ここの避難所の人たちはホテル塩屋崎やかんぼの宿などへ移っていった。4月18日に息子が栢葉に再び戻るなか、自分は郵便局や市役所へいろいろな手続きをしに行った。仕事場から電話があった。それまで避難先から色々(仕事出来るかどうかなどの)連絡を取り合っていたが、20日から小名浜ときわ苑で働くことになった。ここには6月2日までいた。この避難所の食事であるが、朝はパン、昼は自衛隊がいるときは炊き出しだった。だんだん余裕が出てきたとき、控え室にたくさんあった物資はどこへ行ったのかという疑問があった。結局、分配がうまくいかなかったようだ。同地域の人は殆どおらず、(同席していた)蛭田さんが以前同じ職場だったことを覚えており(自分は忘れていた)、話しかけてくれたくらいである。この(中ノ湯の)4人部屋に入るときも誘ってくれた(ちなみにもう一人は1泊してすぐに出て行ってしまった)。

その後、今の中ノ湯に移ったが、他の知り合いは殆どいない。結局、騒いだもの勝ちのようで、声の大きい人がよい待遇(物資や部屋など)を得ているようだ。不満としては、勤めに行っている人は早く宿を出て行く(6時くらい)ので、6時半朝食は遅い。

※夫の姉の旦那さん＝義理の兄が静岡の人で、支援などをしてくれた。

#### <町内会との関わり>

3月11日と12日は情報は入ってこなかった。役場の職員からも情報はなかった。子供たちはネットやワンセグで情報収集や交換をしていたようだ。所在確認はネット(携帯?)で行ったが、なかなかつながらなかった。また、いわきに戻ってきたとき、テレビでL字型の文字情報が多くてびっくりした。原発の話は突然きた。県道36号線を走っていたとき、広野の人は逃げていなかった。

防災訓練は津波を想定したものをやっていた。避難経路は自宅→地区集会場→旧農協→自衛隊の幌車に乗って総合グラウンドへ、というルートで4年に1回、回ってきた(今年は広野、来年は榎葉...といったように)。自分は2年前まで婦人消防(連合町内会単位で結成)に入っていて、役員だったときに炊き出し担当として先の訓練に参加したことがある。これは最初、「名前だけ書いてくれれば...」という形だったのだが、次の人がいなかったため、結局10年くらいやることになってしまった。消防の活動としては、正月(出初め)、春、秋の年三回。あと、1回だけ、部落の人をぞろぞろ連れて訓練したことがあり、また、非常用の袋を一軒一軒回って配布していた。自分が出動したのは1回、女の子が(海への)入水自殺をして、女の子だったことから女性が出動したことくらい。さらに、うちの部落で火事があったばあい、隣の部落が炊き出しする仕組みにはなっていた。

町内会であるが、前原区80世帯が一つの単位になっている。区長(大字)の下に班長(字)と評議員(各部落から1名)からなっており、自分の班は15世帯で、班長は1年交替である。この班長が回覧板を回している。会費は年5300円である。ちなみに亡くなった人であるが、知っている限りでは3名である。ある人は戻って行って津波で流されたらしく、消防団の法被を着ていたから身元がわかったようだ。

防犯活動であるが、夏休みは週1回、土曜の夜にパトロールをしている。あとは、4月と8月に用水路の掃除、4月第2日曜に花祭り、5月はじめにグリーン作戦(缶拾い)、8月は神社の祭り、11月は歩こう会(参加状況はよく、夫は参加していた)である。

防災活動については、訓練を町全体でやっていた(夫は消防団を20年やっていた)。3月11日には消防団が避難誘導をしていた。4月には市内の中央台南小で法被を着て炊き出しをしていた。解散式はいつやったのかはわからない。

また、7日に一時帰宅をしたが、家はほぼ津波で流されていた。

## M 氏(67歳) 双葉郡榎葉町

日時:2011年6月23日 19時~20時 中の湯

インタビュアー:洲崎

### <プロフィール>

榎葉生まれ榎葉育ち。農業を営んでいたが8年ほど前から足の具合が思わしくないため休業中。昭和44年に結婚。長男、長女、次男を儲けた。長男は昭和45年生まれ既婚で長男夫婦と榎葉で同居していたが、今回の震災で長男が原発の仕事をしているため、長男一家は千葉へと移った。長女は昭和46年生まれで同じく既婚、富岡在住だったが今回の震災の際に自分ら夫婦と避難をともにした。娘がいわき市内の高校へ通うため現在はいわき市内にアパートを借りて暮らしている。次男は昭和48年生まれ、いわきの三和に婿養子にいった。

### ＜震災当日からの流れ＞

震災当日は家にいた、地震発生後家にいた夫は近所を回りに、嫁は娘を学校へ迎えにいっただ。自分は足も悪かったため家で片付けなどをしていた。津波については家も高台にあったためまったく気づかなかった。近所を回っていた夫が役所の人にとりあえず役場に避難とのことを聞き、毛布一枚で近所の人たちとまとまって役場に避難した。翌日、榎葉町で全体避難が決まり、バスでいわき市の中央台南小学校に避難した。このバス移動の際に部落の人たちとはバラバラになってしまった。そして一週間後、榎葉町と姉妹都市提携を結んでいる会津美里町に移動。さらに4月1日に孫の学校の都合によりいわきに戻ってきた。娘夫婦はいわきにアパートを借りたが、自分ら夫婦はいわき高校へと移った。そして5月21日に内郷コミュニティセンターに移る予定だったが避難場所がまたもや体育館のようなところだったので、自分の足の具合を考えてつらいものがあると町に相談したところ、中の湯を紹介されて現在も中の湯にいる。

### ＜避難所での生活＞

中央台では水がないため相当な不便だった。トイレなどは特に不便であった。さらに食事もおにぎり1個などが多く、榎葉から移動してきた初日などはおにぎり1個を2人で半分にして分けて食べていた。ちなみにここでは集落は違うが同じ榎葉からの避難ということで知り合いなどはいた。会津、水などの問題や食料の問題は少しは改善されたが、この時期の会津地方は相当な寒さであった。

食料の問題は少しは改善されたが完全に改善はされていなかった。お店に買いこいこうにも店が歩いて50分くらいかかるころにあつたらしく、そうもいかなかった。

いわき、食料には不自由はなかった。武道館のようなところの3つの部屋に30人ずつの避難であった。ここではそれぞれバラバラに避難してきていたが同じ部屋に住んでいた人々とは仲良くなった。中の湯、個室を与えられてこれといった不満はなく天国のような環境である。

### ＜町内会と防災活動＞

自分の町内では近所付き合いがしっかりと形成されており、防災訓練なども度々行われていた。しかし、防災訓練は津波に対するものではなく原発対策のものであったため、地震の際には機能しなかった。ちなみに町内の方々とは今でも携帯電話などで連絡を取り合っておりそれぞれの行方がどうなっているかをしっかり把握している。

### ＜今後の期待と不安＞

今まで広い家に住んでいたため、仮設住宅のような狭い家に住むのがう不安である。中の湯には来年の3月までいることができるためまだあせりはない。希望としては再び集落の人たちと暮らしたい。そしてなるべく早く帰りたい。今は自分たちより娘夫婦が職を失ったためそっこのが不安である。

## N 氏 いわき市薄磯(区役員)

日時:2012年2月22日 N氏オフィス(山六観光)

インタビュアー:菅野、洲崎、渡部

### <プロフィール>

昭和26年に薄磯で生まれてからずっとここで暮らしている。親の代から続く土産物屋をきりもりしつつ、漁業を営んでいた。家族構成は妻、息子2人に娘1人の計3人の子供、母であり、子供は全員成人しているため別々に暮らしていて、高齢の母も仮設住宅に住めないという理由から施設に入居している。

### <町内会の活動>

震災前まで区長とその下に役員だけだった町内会の組織を、復興支援に当たって役員のさらに下に50代以下の比較的若い年齢層の市民からなる「復興支援特別ボランティア」を有志により設置、初めは10人ほどであったが最近では30人ほどにまで輪が広がった。この特別ボランティアは自分の発案であり、発足には「若い人がいないと地域の復興はありえない」という強い思いからであった。若い人が根を生やさない限りは、新しい世代も生まれない。自分たちで復興を成し遂げた土地になら、帰ってきたいと思えるはずだという信念のもと、町内会での話し合いで年配者と若い人が口論などになった際、橋渡しの役を買って出ているのだという。しかし、市からの明確な回答がない今、町内会の活動を活発に行おうにもそれができない状態であり、定例会のようなものは開催できていない。

### <今後の課題>

若い人は新しい土地にいてそこから根を生やすことが可能であるが、年配者にはそれができない。そのうえ、若い人に従うほかないところもある。時間がたつにつれて、どんどんこの土地に若い人が戻りにくくなってしまふことは明確なため、時間との戦いともいえるかもしれない。年配者をかかえる世帯の不安は「もし年配者がなくなった場合、どこにつれていけばいいのか?」ということが多いようだ。今までずっと一軒家で暮らしてきた住民は、年配者が亡くなってから家に連れ帰れずに病院からそのまま葬儀場に...というのに抵抗がある。かといって借家である仮設住宅等に連れ帰るのは不可能だ。

こうした不安からもいち早い復興が望まれているが、行政の対応が何もなないため住民に何も明言することができないのが現状だ。町内会役員も住民も「早くこの地に戻りたい」という思いは同じはずなのに、トラブルが増えつつあるという。そうしたトラブルを防ぐためにも、そして何より復興のためにも、一日も早い行政からの回答を待つばかりである。

## 〇 氏 いわき市永崎

日時:2011年8月28日 20時~21時半

インタビュアー:菅野、洲崎

### <震災前の活動について>

震災前は消防団としての活動は全体では年に1回程度のポンプ点検程度で、自分もほとんど活動には参加していなかった。自分は22~23年の消防団のキャリアがあり、訓練なども過去に受けていたことから、参加していなくても要領はつかんでいた。

### <震災時における行動、問題点>

震災時、自分は仕事中であり、すぐに地元の永崎に帰ってきた。家族とは事前に防災について話あっていたため、家族はすぐに高台へと避難した。自分は消防自動車をとりいき、サイレンでよびかけを行った。消防団のあいだではサイレンで集合の合図になっていたらしいが、そのときは誰も来なかった。ちなみにこのときのサイレンを聞いて地元の小学校の校長も津波の危険を察知し、児童を避難させたという効果があった。自分は海の様子を見て、テトラポッドあたりまで水が引くのを見て危険を察知し近くの保育園に避難した。その後は消防団員ということでもわりの人たちと協力し、取り残された何名かを救助した。

この時の問題点としては、予想通り団員がみんな勤め人で職場からすんなり帰宅できなかったという点、さらには防災無線がならなかったなどがあった。また、重要な点としては普段から機械に頼りすぎて緊急時に使えないということだ。いざとなったときはアナログのほうが強い時がある、すべてを機械化するのではなく残しておかなきゃいけないものがある。

### <震災後>

避難所は避難者が知り合い同士ということで雰囲気はよかったという。永崎地区は近所付き合いが強く、住民同士の連携がうまくいったとのことであった。若い世代がうまくリーダーシップをとることで高齢者も従ってくれてうまくいった。空き巣被害なども多発したため、自分を含めた有志何名かで深夜0時くらいから見回りを行った。ストーブの灯油の補給なども自主的に行っていたとのことである。また、住民同士の復興への意識を高めるため、ステッカーやTシャツなども作成するなど意識の高さがうかがえた。

### <今後に向けて>

消防団自体の訓練も増やすべきだが、地域住民も連携した避難訓練をしっかりと行うべきであるとのことである。消防団のみが意識が高くてもダメだから住民にも日ごろから震災に対する意識をある程度もつべきである。また、高台のほうに避難通路を作るなど行政にも要望したいことはある。

**P 氏(69歳) いわき市小名浜**

日時:2011年6月14日 16時~17時半 自宅(借り上げ)

インタビュー:菅野、洲崎、寺木

## &lt;プロフィール&gt;

昭和17年1月15日生まれ 満69歳。生まれも育ちも小名浜である。高校を卒業した後、遠洋マグロの船に乗る。25歳で現在の奥さんと結婚し、それを機に丘にあがり小名浜輸送所で63歳まで働いた。現在は奥さんとペットの柴犬と暮らしており、一人娘は平に勤めている。

## &lt;震災直後の状況&gt;

自宅でテレビを見ていたところ、地震がきた。津波の情報は全く入ってこなかったが、津波が来る予感がした。大事なものだけをもって、危険物の始末をした後、奥さんと犬と高台にある浄光院(寺)に避難した。また、自宅近くのコンビニで勤務していた、若い店員に避難を促した。

## &lt;地域における防災活動&gt;

自分は隣組の組長をしていた。地震のあとすぐに、近所の人たちに避難を促し、隣組みんなで浄光院に避難した。(被災前について)隣組内での防災訓練はしていなかった。現在は隣組内で連絡を取っていない。

## &lt;被災状況&gt;

津波によって自宅や倉庫が全壊した。

## &lt;現在までの経過と評価&gt;

津波を恐れ、奥さんと犬と隣組の人たちと高台の浄光院(寺)に避難した。その後、15時過ぎの第一波の後、一度ひとりで家に戻った。20時の満潮になっていた際の津波が一番ひどく、その津波で自宅が全壊した。次の日に、家族で小名浜東小学校の体育館に避難したが、そのあとすぐに小名浜二中の体育館に移った。

避難所では、新聞が毎日・民報・民友・読売の4誌そろっており、テレビもあったため、情報は不自由なく入ってきた。避難所での最初の夜ご飯は乾パンだったが、その後はずっとパンの食事が続き、たまにおにぎりも配られた。おやつは紙パックの野菜ジュースと魚の缶詰だった。イスラム教のインド人やネパール人が避難所に炊き出しにきて、カレーを振舞った。

避難所生活に疲れ、新しく住むところを探し始めたが、ペットがいたため、いわき市はアパートを斡旋してくれなかった。そこで自分で、ペットを飼うことのできる現在のアパートを見つけ、5月中旬から住み始めた。県の特例で、2年間は、アパートで2人暮らしの場合1ヶ月6万円補助してくれるようだ。

<今後の生活と期待>

地震前の自宅の隣にコーポがあったが、そこには回覧板もまわらないし、行事にも参加しなかったが、コーポやアパートにも隣組は必要なのではないか。いわき市にはもう特に期待はしていない。

**Q 氏** いわき市久ノ浜

日時:2011年6月17日 18時～

インタビュアー:菅野、寺木、渡部

<プロフィール>

要介護状態の母と二人暮らし。自宅は久ノ浜であるが、高台であった。そのため、自宅に被害はなし。

<震災日の状況>

自宅の畑を耕した後、自宅で寝ていた。要介護状態の母とテレビを観ているとテレビの警報が鳴った。津波に関する災害無線は流れなかった(後の話によると地震の為、壊れてしまっていたらしい)。30分後、停電と断水が起こる。消防車が避難を呼びかけて周っていたが良く聞き取れず。風が吹く様な音の後、海沿いの集落の家の二階までの高さの津波が起こる。

<地域における防災活動>

防災訓練はなかったものの、避難場所は決められていた(小学校、中学校)。地域活動:回覧板が10日に1回。半年1回の浜の清掃と年1回の浜の祭り。

町内会の幹部は震災後、真っ先に避難→町内会が機能せず。また、町内会の震災マップも機能せず。

有事の際に「要介護者の避難補助の申請」を出していたが、市からはなにも補助等なし。もちろん、近所からの手助け等もなく、完全に孤立してしまっていた。

<被災状況>

自宅の畑の野菜が土壌汚染により食べられなくなった。地震による被害は物が落ちた程度で、津波による被害はなし。

<現在までの経過と評価>

3月15日に母を須田医院に避難させる。その際、自宅の電話が使えなかったため、自宅の近くをまわっていた自衛隊に頼んで無線で救助を頼んだ。母を須田医院に入院させた後、自分は須田医院に近いアリオスに避難した。

アリオスでの避難生活だが、暖房はなく、毛布のみで暖を取っていた。また、電話もなく、使

えず。食事は2食のみで、温めることもできない(火気厳禁)。

被災者向けの連絡は伝言板を通して行われていたが、管理が行き届いていなかったのも、「どれが最新の情報なのか?」「どれが自分に対する情報なのか?」が分からず、憤りを感じた。被災者同士では、特にもといた地域などは関係なくコミュニケーションがあり、今でも連絡を取り合う仲になった人もいるほど。

4月10日に車を取りに行くために路線バスで四倉→タクシーで自宅へ向かった。そして、夜に平体育館に避難した。平体育館では食事は3食おやつつきだった。長崎市から市の職員がボランティアとして来っていた。ストーブがたくさんあり、灯油も不足していなかった。

自宅に戻ってからであるが、自分たちに何も言わず、避難して行ってしまった隣の家には、その親戚が入居していて、元の住人も何度か足を運んでいるようだが、特にコミュニケーションはなし。むしろ、避けていたようだ。



市内避難所・被災者調査



市内避難所・被災者調査



市内避難所・被災者調査



市内自治会長調査